

373
382

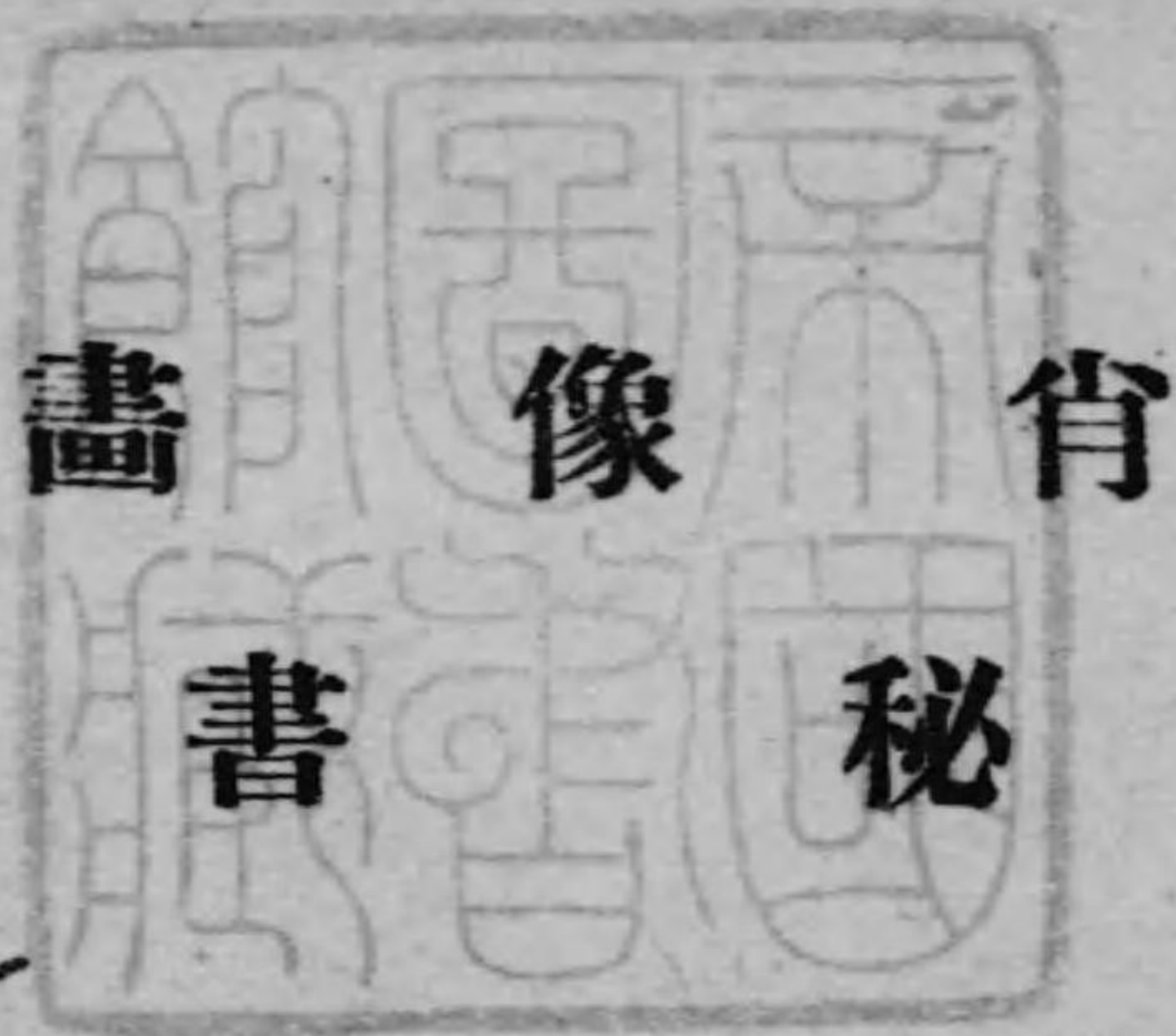


始
←

肖像畫秘書

日本肖像畫研究會編

373-382



本日肖像畫研究會編

序

- 立派な肖像書が描けたら？
- 父母兄弟の顔が、自由に描けたら？
- 先生や友達の顔が、スラ／＼と描けたら？
- そんなに愉快であらう！
- 本書は、この愉快を望む青少年の爲にその最も簡易なる描き方を教へたものである。

大正八年八月

目次

□ 記事 一

□ 娛樂と繪畫……………一

□ 學び易い書法……………五

□ 用具……………八

□ 肖像畫の價值……………一三

□ 解剖學と娛樂的に描く場合……………一六

□ 正面の顔の代表的型……………一七

□ 側面の顔の代表的型……………二三

- 正面及側面の顔の代表的型と寫生する場合……………二六
- 俯仰その他の向きの顔……………三三
- 簡易なる秘法と練習……………三四
- 直線と曲線の引き方……………三五
- 陰影の描き方……………三六
- 下圖の必要……………四〇
- 如何なる初學者にも肖像畫が正確に描ける方法(其一)……四二
- 擦筆畫の肖像の描き方……………四七
- 摸寫と繪手本……………五〇
- 寫生の愉快……………五三

- 觀察力と記憶力……………五四
- さまざまの表情……………五七
- 静止してゐる顔の寫生の仕方……………六一
- 石膏像の寫生……………六五
- 動いてゐる顔の寫生の仕方……………六七
- 初學者にも顔が似る寫生の呼吸……………七三
- 最も顔の寫生の仕易い場所……………七七
- 漫畫肖像の描き方……………八〇
- 如何なる初學者にも肖像畫が正確に描ける方法(其二)……八四
- 繪の具……………八六

□「わが顔」募集……………八

■挿入畫

□隣りの娘（岡本大更畫伯筆）……………七

□正面の顔の代表的型……………二

□側面の顔の代表的型……………三

□陰影の描き方……………六

□寫真引伸し方……………四

□S君の初夢（富田溪仙畫伯筆）……………五

□さまざまの顔（その一）……………五

□石膏像の寫生……………六

□さまざまの顔（その二）……………六

□さまざまの顔（その三）……………七

□さまざまの顔（その四）……………七

□さまざまの顔（その五）……………七

□獨逸皇帝の寫真……………六

□獨逸皇帝の顔……………六

□漫畫の顔……………三

□達磨 近藤浩一路畫伯筆 織田東禹畫伯筆……………八

赤松隣作畫伯筆

目次終り

肖像畫秘書

日本肖像畫研究會編

娛樂と繪畫

人間は、幼年の時代から老年の時代に至る迄、その年齢に伴つた娛樂がある。玩具をならべたり、繪本を見たりして楽しむ時代から、雙六をしたり、獨樂廻しをして楽しむ

時代、扱ては玉突、圍碁、骨董といふやうに、娛樂の種類は、人によつて各異つてゐるが、然し『私には何の娛樂も無い』といふ人は、極く少いと云つていゝ。

幼老通じて種々雑多の娛樂を、二別して、善い娛樂と、悪い娛樂とになる。善い感化を與へるのが善い娛樂で、悪い感化を與へるのが悪い娛樂であつて、善惡共、その數枚舉に違ないが、人として善い娛樂に親み悪い娛樂に遠ざからなければならぬ事は、今些に改めていふ迄もない事である。

繪を樂しむ事、これは確に善い娛樂であつて、然も善い

娛樂に屬すべきものゝ中の、上々なるものであると斷言して憚らない。

繪を樂しむといつても、幼年の時代のやうに繪本を見たり、學生時代のやうに泰西名畫を書齋に飾つたり、又中年の時代のやうに古書に親んだりする、所謂見て樂しむのと、自分で手を下して、描いて樂しむのとの二つに別れる。そのいづれも興味は淺くないが、描いて樂しむ人は、必ず見ても樂しんでゐる人であつて、見て樂しむだけでは満足が出來ず、遂に筆を下して描き出すといふ事になるのであるから、見て樂しむ人に比して、一段と樂しみが深い

譯である。

本書は、この描いて楽しむ人の爲に著はしたものであるが、描いて楽しむといつても、風景の書もあれば草木の書もあり、又鳥獸の書もある。然し取り別け興味の深いのは肖像畫である。百人が百人違つた顔を、自由に描きこなす事が出来たら、その愉快は、他の遠く及ばない所である。尤も肖像畫は、その人の顔に似なければならぬのであるから、風景や鳥獸に比して、難かしくはある。難かしい代りに、巧みに描けるやうになつたら、その興味も他に數倍する譯である。

本書は、いろくの難かしい理論を避けて、出来るだけ學び易い方法で、小供にでもよく合點のゆくやう、至つて解り易く、その描き方を教へたものである。本書により高尚なる趣味を得、そして悪い娛樂に染まないうで済む事が出来たら、著者は、社會の爲且つその人の爲に喜んで止まぬ次第である。

學び易い畫法

洋書といつても、油繪、水彩畫、擦筆畫、ペン畫といふ

やうにいろくくと別れてゐる。そのいろくくとある書法の
中で、最も學び易いのは、鉛筆書、ペン書、又は毛筆書で
ある。(こゝでいふ毛筆書は、鉛筆やペンで描くやうに毛筆
で描く繪の事をいふのである) これ等の書法は、用具とし
ても鉛筆或はペン毛筆、それに消護謨位のものであれば用
が足りるのであるから、極く手輕でもあり、且つ應用の範
圍も至つて廣い。

又趣味の上からいつても、各書法それく持ち前の書風
がある以上、その面白さも、他の書法に比して少しも劣る
所がない譯である。

第一學び易ければ學び易い程、興味を覺える度が早く、
従つて飽きの來るのが遅い。學び難いもので飽きの來る時
分には、學び易いものならば、興味を覺える時分迄進む事
が出来るといふやうな譯であるから、本書は、これ等の理
由の爲に、鉛筆書、ペン書、毛筆書を主として、その獨習
法を述べる事とする。

(第一圖) 隣りの娘

岡本大更書伯筆



用具

○用紙

鉛筆書、ペン書には、書洋紙又は木炭紙、ワットマン、ケント等いづれでもいゝ。然し書洋紙は、價格が低廉だから、稽古中の、描き損じの多い時代は、この紙で充分である。

毛筆書は、西洋紙日本紙、いづれでもいゝ。元來毛筆は、古來より、薄い柔かい日本紙に、字なり繪なりを書く爲に

製造されたものであるから、日本紙はいふ迄もなく、厚い硬い洋紙、その他どんな種類の紙でも差支はない。

寫生帳即ちスケッチブックといふのがある。書洋紙を、携帶に便利な大きさに切つて、それを二三十枚綴つた帳である。これだと、寫生に出掛ける場合には至つて輕便で、且つ描いた繪が散亂する事無く、悉く保存されるのであるから極く重寶である。

○鉛筆

下圖を描くには、色の淡い鉛筆がいゝ。それは、描き損じたのを度々護謨で消す爲、色の濃いのだと書面を穢くす

るし、且つこれを奇麗に消さうと思ふ爲に、紙の肌を傷めるからである。

下圖が描けてしまつてからは、心の柔かい濃いのであつた。尤も熟練すると、下圖を描き直す事も少くなるから、柔かい濃いのが一本だけでも用が足りる。

アカデミーといふ鉛筆がある。寫生には、この鉛筆が一番いい。

○毛筆

どんな種類の筆でもいゝ、然し顔のやうな、細かい線を要するものを描くには初めは、眞書の方が描きいい。熟練

すれば、どんな筆を持つても自由に描けるやうになる。

○ペン

ペン書用のペンがあるが、別にそれに限つた譯でなく、どんな種類のペンでもいゝ。然しあまり粗製品は、尖がひつかつて描き悪いから避ける方がいい。

寫生には、萬年筆が重寶である。第一インキを持つて行く世話がない。

○インキ

インキは變色する憂がある。便利墨とつて、墨液をブリキの小罐に入れたのがある。これだと變色する憂がなく

つていゝ。

○消護謨

あまり粗悪な品は、石のやうに硬い爲、紙面を傷める。又消す度にポロ／＼缺けたり、さうかと思ふと、糊のやうに紙面に粘りついたりするものも避けねばならぬ。柔かたで、そしてこのやうな缺點のないものならいゝ。

○ナイフ

書洋紙を適宜の大きさに切つたり、又インキなどで描いた書の一部を消す場合、ナイフの尖で紙面を削つたりする爲に用ゐる。鉛筆の心の折れた時に、それを削るのはいふ

迄もない。

肖像畫の價值

人の顔は、十人百人千人、否地球上の人類を悉く列べてみても、同じ顔は一つもない。中には、随分よく似た顔があつて「誰と誰とは瓜二つだ」など、世間でいふ。然し顔全體はよく似てゐても、その二人を列べて比較してみると、随分異なつた點を發見する事が出来る。目がほゞ同じだとするも、鼻の格好が多少違ふとか、鼻の格好が同じだとす

るも、口の格好が違ふとか、顔中片ツ端から、多少なりの相違点を発見する事が出来る。

この相違が、同じ顔のない理由で、顔の格好、目鼻口耳等の格好、次いでそれ等の位置等、似ない人ほど其相違が甚だしい譯である。

斯くの如く人の顔は、萬人萬別であるから、肖像を描く上に於て、他の書を描く場合のやうに融通がきかぬ。一點一線の誤魔化しもきかぬ。一寸いゝ加減の線を引いても、その人に似なくなる場合が多いのであるから、どこ迄も正確に描かねばならぬ。その代り、忠實に正確に、描いてゆ

けば、必ず似るのである。

元來肖像畫は、似ると似ないで、その價值が定まるといふのであるから、大變難かしくも考へられる。然し、二度三度と練習してゆくと、他の繪より難かしいだけ、それだけ興味も深い。且つ描き方の呼吸を覚えてしまへば、それ程の困難もなく描ける譯であるから、そのつもりで練習される事を望むのである。

解剖學と娯樂的に描く場合

肖像畫を専門的に學ぼうと思へば、解剖學によつて、骨、筋肉等を研究してかゝらねばならないのであるが、肖像畫を娯樂的に描かうとする人には、これを深く知らずとも差支がない。

第一、解剖學を知ると、甚だしく筆の自由が束縛せられて、一寸描けるやうになる迄には、非常なる努力と苦心とを要する。尤もこれだけの階梯を踏んでかゝればいゝには

違ひないが、娯樂的に描かうとする人には、斯かる根氣も續かなければ、又それ程苦心して迄も知る必要がない。是が故に本書は、解剖學を教へずに、他の簡易なる速成法によつて説く事としたのである。

正面の顔の代表的の型

前にも述べた通り、人の顔は、一つとして同じのがないのであるから、そのどの顔も、唯一つの型を以て定める事は出来ない。左に示すのは、唯その代表的の型である。だ

からこの型と、描かうとする人の顔とを比較して、型よりは目の開きが広いとか狭いとか、鼻が大きいとか小さいとか、又耳の位置が上だとか下だとか、型は描く土臺としてそして實際見た通りの顔を描かねばならぬ。ところが、初めのうちは、型に捕はれて描くから、どの顔も同じやうなのが出來てしまふ。だから、型に捕はれずに描くといふ事が、最も肝要な譯である。

左に正面の顔の代表的型を説明する。

一 先づ、描かうとする頭部の大いさを定める爲に、上下二點を打つて、頭部の縦の長さを定める。そしてその

二點を、直線で繋ぐ（イ、ロの横の線と、縦の線とが交つてゐる所が、その二點である）

二 次に其縦の線を、五等分したる横の線を引く（ハ、

ニ、ホ、ヘ線）

三 五等分したるその一つを四等分する。イハ、バニ、

ニホ等、どの間隔でもいゝが、ホへを分割するのがいゝ。

ホへを分割した横の線は、どの道分割する必要があるからである（リ線はホへの二等分線、チ線はホリの二等分線、即ちホへの四等分線）

四 チ線とロ線との間隔を、ニ線の少し上部より、縦の

線から横へ移す。この點が、頭部の横幅の一番廣い場所である。

五 縦の線を直径として、イロの間隔で、今移した點を一番廣い部分とした、圓の如き半卵圓を書く。これが、頭部の縦半面である。

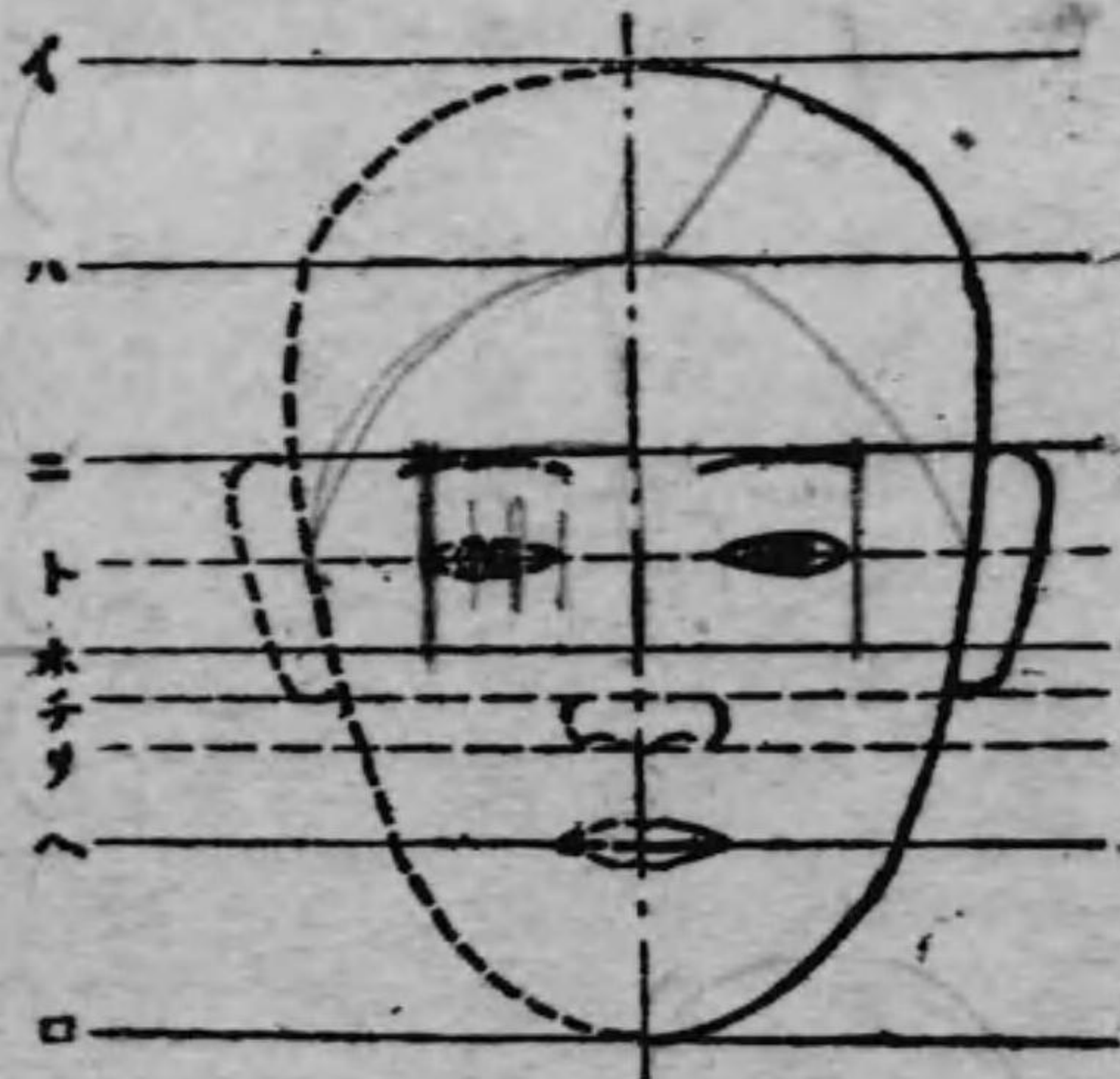
六 この縦半面を、右なら左、左なら右へ移す。これで頭部全面が出来上る。

七 左右兩半面は、輪廓は勿論、目鼻口等いづれも同じものでなければならぬ。だから左半面に描いたものなら右半面に、右半面に描いたものなら左半面に、一々正確

に移しつゝ描いてゆかねばならぬ。

八 ハ線と縦の線と交叉したる點は、頭髮の生え際である。

(第二圖)



九 ニ線が眉の高さ。

一〇 リ線が鼻端。

一一 ヘ線が口の高さ。

一二 ホ線を二等分する

(ト線) これが、目の中央

を横ぎる線である。

一三 チリ線の間隔は、鼻

翼の高さ。

一四 眉と鼻翼の上端迄との間隔、即ちニチ線の間隔が耳の長さである。

一五 目の幅は、縦の線を五等分したるイハ、ハニ等の間隔の四分ノ三に等しい。鼻端の上端と口との間隔、即ちチへ線の間隔がこれである。

一六 目と目との間の距離は、目の幅に等しい。

一七 眉は目より稍長く、弧線を書いて、目の上に横たはる。

一八 鼻翼の幅は、目の幅より心持ち廣い。

一九 口の幅は、鼻翼の幅より稍廣い。

側面の顔の代表的型

次は側面の顔の代表的型。

一 正面の顔と同じやうに、初め頭部の縦の長さを二點で定め、そしてその二點を直線で繋ぎ、その線を五等分して、イ、ハ、ニ、ホ、へ、ロの横の線を引き、尙ト、チ、リ線を引いて、生え際並に目鼻口耳等の高さを定め

る。

二 次に、正面の顔で横巾の一番広い場所、即ちニ線の少し上部の、左右両端より、縦の線に平行したる二線を引く（ヌ、ル線）

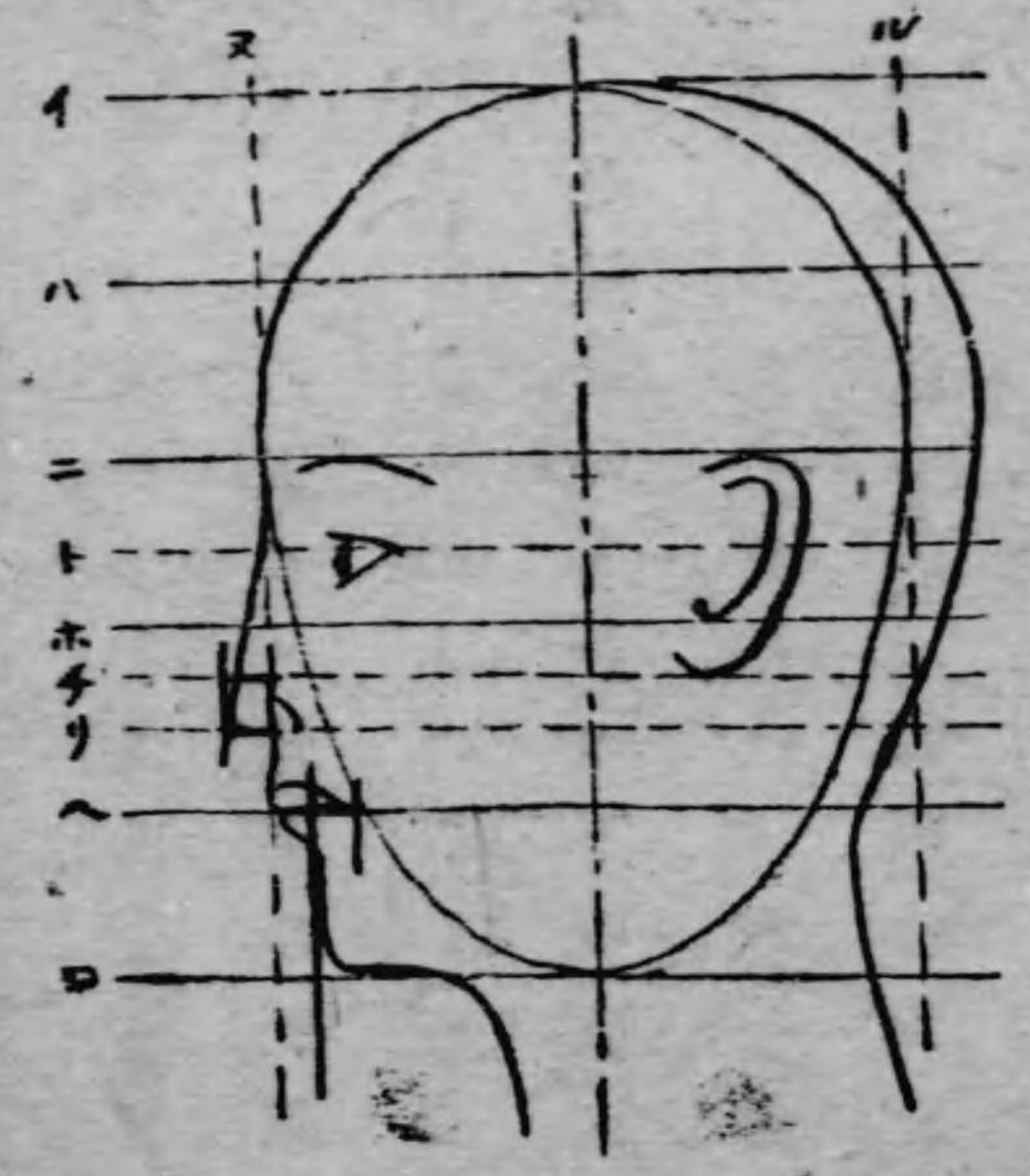
三 イハの間隔を三分する。そしてその下三分ノ一の點を、ル線の上に置く。この點を過ぐる弧線を、縦の線の上端、即ち頭頂より發して、圓の如くに引く。

四 この弧線は、三分ノ一の點を過ぎてからは、圓に沿ふて下方へ、ホンノ少しづつ、廣い目に引くのである。そして目の高さ、ト線に至る。

五 ト線よりは、漸次狭い目に引いて、へ線に至る。

六 へ線の稍下方で、頭部は終つて、頸部に連絡する。これで後頭部は出來上つたのである。

(第三圖)



七 リ線と、縦の線ヌ線と交叉したる點より、ヌ線の外へ、リ線上にチリの間隔を移す。そしてその點と、目の高さの線ト線と、ヌ線とが交叉したる點とを繋ぐ。これが鼻の高さで

ある。

八 鼻の尖に少し丸味をつけて、リ線上に彎曲する。そして、鼻の尖とヌ線迄の距離より稍狭い間隔を、ヌ線から内方に、リ線上に置く。これが鼻翼である。

九 鼻唇溝即ち鼻の下溝は、ヌ線の上にある。

一〇 鼻端の横幅より稍狭き間隔を、ヌ線から内方に、ト線上に移して、瞳の位置を得る。そして、その点から内方へ、鼻端の横幅より心持ち狭い間隔を移す。これが目の横幅である。瞳を底邊とし、目の横幅を垂線として三角形を書けば、目が出来上がる。

一一 眉は、目の上に、目より前後に稍長く、弧線を書いて横たはる。

一二 口の幅は、鼻端の横幅より稍廣い。

一三 下唇は、ヌ線の稍内方より初まり、弧線を書いて腮に連る。

一四 腮は、口の幅を二等分したる、ヌ線と平行なる線の上より初まり、小さく彎曲して、口線の上に移る。

一五 ヌ線と、中央の縦の線との間隔を三等分したる點を、口線上に置く。そしてヌ線から三分ノ二の點より、

真は頸部に連絡する。

一六 耳の上端は、中央の縦の線と、ル線との中間より初まり、下端なる同間隔の前三分の一の點へ、斜めに横たはる。耳の幅は、長さの三分の一より稍廣い。

正面及側面の顔の代表的型と

寫生する場合

正面及側面の顔の代表的型は、前述の通りであるが、次に、寫生する場合には、代表的型を、どういふ具合に取扱へばいゝかといふ事を説明しやう。

先づ、描かうと思ふ顔の大きさの代表的型を、下圖用の鉛筆で書く。そしてその型と、描かうと思ふ人の顔と、どれだけ相違してゐるかを比較するのである（尤も初めは、静止したる人の顔）

第一は輪廓である。型より頭が大きければ、大きいやうに型を訂正する。腮が長ければ、長いやうに型を訂正する。續いて眉、目、鼻、口と、上部から下部へ、順次精細に比較しては、型を訂正してゆく。そして各部分の訂正が終れば、今度は、顔全體に就て比較してみる。訂正した顔と、實際の顔とが似てゐない點があれば、それは、訂正が完全

に出来てゐない爲であるから、再び繰返して各部分と比較してみる。するとどこかで、間違つてゐた箇所が発見される。訂正が終れば、又顔全體に就て比較してみる。まだ似てゐなければ、又繰返して比較し、且つ訂正する。

一回よりは二回、二回よりは三回と、訂正を重ねるうちに、必ず實際の顔に似て来る。一寸でも似てくると、面白味が伴ふからいやにはならないが、二三度繰返して似ないと、飽きが来る。その場合、描くのを中止してしまつてはいけない。實際の顔と同じ顔が、紙面に表はれた時の愉快を思ふて、根氣よく描かねばならぬ。

或實業家が「成功しない人は、今一ト息といふところで匙を投げるからである。モウ一寸辛抱すれば必ず成功するのだが、成功の入口迄来て、くたばつてしまふ」と云つた事がある。肖像畫も其通りで、今一ト息といふところで、飽きが来るのであるから、その場合に、決して廢してしまつてはいかぬ。一寸の根氣力さへあれば、必ず描けるやうになる。

話は一寸横道に入つたが、上述のやうな寫生を繰返してゐると、一回目の寫生よりは二回目の寫生、二回目の寫生よりは三回目の寫生と、漸次樂に描けるやうになつて来る。

遂には、代表的の型などを、一々紙面に描いて比較しなく
つても、頭の中で、代表的の型と實際の顔との比較が出来
るやうになり、従つて、初めから實際の顔に取りかゝる事
が出来るやうになるのである。

尙寫生の事に就ては、後章で詳細説明する事とする。

俯仰その他の向きの顔

顔の向きは、正面、側面に止らず、その他いろ／＼の向
きがあるが、その向きの方向によつて、目、鼻、口等の位

置なり格好なりが變る。それを一々、型で以て示すのは敢
て困難なる事ではないが、斯くすると、初學者は寫生する
場合に當つて、これも型、これも型と、非常に窮屈を感じ
且つ判断力が減殺される。

夫れ而已ならず、正面及側面の顔が、満足に描けるやう
になれば、いろ／＼の向きの顔を寫生するにしても、判断
力が自然に發達して、位置、格好等が誤りなく割出される
やうになるのである。それが爲に、正面及側面以外の顔に
對しての代表的型は、省く事としたのである。尙挿入書
『さまざまの顔』を参考とせられたい。

簡易なる秘法と練習

繪畫に限らず、何事でもさうであるが、少しも手を下さずには上達しない。將棋でも、圍碁でも、又歌かるたでも二回三回と練習を重ねて、そしてだんく上手になるのである。

人の顔の描き方もその通りで、如何に簡易なる秘法を教へても、普通二三十回の練習で、自由に描けるやうになるものとすると、それを數回の練習で描けるやうになるとい

ふやうに期間の短縮は出来るが、全然練習をしないでは、何日迄たつても描けるやうにはならぬ譯である。

練習と根氣、何をやるにも必要な事であるが、殊に人の顔の描き方のやうな、取っ付きが幾分困難なものには、別けて必要であるから、解りきつた事ながら特にこの一章をもうけた次第である。

直線と曲線の引き方

肖像畫を形造つてゐる線、即ち直線と曲線との引き方を

稽古せねばならぬ。本書に述ぶる所の鉛筆書、ペン書、毛筆書等は、線のみを以て仕上げる書法であるから、特に線の使ひ方に留意しなければならぬ。

稽古の方法は、先づ紙面に間隔のある二點を打つ。そして、その二點を直線或は曲線で繋ぐ、即ち一の點から初まつて、二の點の上止まる直線或は曲線を引くのである。つまり、長い直線や短い直線、或はいろいろのカーブの曲線が、自分の思ふ通りに、自由自在に引く事が出来るやうに練習するのである。

次は引いた線であるが、スウツと、少しも躊躇しない線

でなければならぬ。初めのうちは、震ふた線や、ごちく、いた線。又はいちけた線が出来るが、少し練習すると、勢のいゝ線が引けるやうになる。

線の使ひ方を放任すると、いくら全體の形の調つた顔が出来ても、線が悪い爲に、顔全體がいちけて見え、折角の苦心も水泡に歸してしまふ。

尤も線の使ひ方は、書の練習に伴つて自然にでも上達はするが、線の使ひ方から練習してかゝれば、顔全體の形が調はなくとも、初めから生きくした顔を描く事が出来るのである。

陰影の描き方

(第四圖)



顔の各線中、陰影になる場所は、陰影になる場所に至る程、漸次線を太く、且つ濃く描いてこれを表すのである。尤も濃く淡く描き得るのは鉛筆書の場合で、ペン書、毛

筆書では、唯太く細く描いてこれを表はすに止まる。

顔の陰影になる場所を示すには、直線或は曲線を、數本或は十數本並行せしめてこれを表はすのである。陰影の濃淡の度を示すには、淡い方より濃い方に向つて、漸次並行線の間隔を狭めて引くと同時に、漸次線を太く用ゐてこれを表はすのである。

尙それ以上に濃い陰影は、並行したる直線或は曲線を交又せしめてこれを表はし、最も濃い陰影は、間隔を置かすに線を並行せしめる、即ち眞黒に塗り潰してこれを表はすのである。

下圖の必要

鉛筆書、ペン書、毛筆書等いづれを描くにも、初めは、鉛筆で下圖を描かねばならぬ。初めから紙面に向つて、ペン或は毛筆でスラ／＼描く事が出来れば、甚だ結構であるが、なか／＼さうは描けぬ。ペン或は毛筆では、描き損なつても消す事が出来ないから、どうしても鉛筆の下圖が必要で、これならば形はいゝと思つたら、それからペン或は毛筆で描くといふ順序になる。

尤も熟練すれば、下圖を描かなくとも、自由に描けるやうになるから、下圖が自然に省略されるやうになる。然し極く未熟なうちから、強いて下圖無しに描くといふ事は、一方ならず進歩の妨げとなるから、絶対に禁じなければならぬ。

如何なる初學者にも肖像畫が

正確に描ける方法 (その二)

如何なる初學者にも、簡易に、正確に肖像畫の描ける方

法がある。それは寫眞を引き伸して描くのである。次にその引き伸し方を説明する。

先づ圖の如く、寫眞面に縦横の線を引く。但し縦は縦、横は横で、各同じ間隔でなければならぬ。縦の線の間隔は、三分でも四分でも別に制限はないが、あまり狭いと、せいこましくつて、却つて描きにくい。横の線の間隔は、縦の線の間隔の二倍とする。即ち一の線と二の線との間隔は、一の線と二の線との間隔の二倍である。尙縦横線各の間隔は、廣かつたり又狭かつたりしてはならぬ。絶対に、正確なる間隔を保つ事が肝要である。

次に紙面に、寫眞の縦横線の、三倍或は四倍の間隔ある

(第五圖)



縦横線を引く。これも、正確に三倍或は四倍の間隔でなければならぬ。間隔が同じでなければ、肖像が正確に寫せないからである。尙描かうと思ふ大きさによつ

て、寫眞の線の、五倍或は六倍の廣さに、間隔を開けるのはいふ迄もない。

線の數は、勿論寫眞と同じ數でなければならぬ。又各線が紛れないやうに、縦の線には、1 2 3 4……、横の線には、一二三四……の番號をつけて置くのである。それも極く見やすいやうに、左の上の角から、縦の線は横へ、横の線は下へ、番號をつけてゆくのである。

これから描き出すのであるが、縦横線の番號を辿つて、一長方形内の顔の線を、紙面の同長方形内に引伸しつゝ描いてゆくのである。第一に輪廓を取つてしまふ。それから

眉、鼻、口、耳等、上部から下部へ、順次に描くのであるが、口、耳等を引伸すのに、長方形の面積が幾分廣過ぎて、引伸し難いと思へば、圖の如く、横線の間隔を二分して面積を二つに分け、そしてこれを描くのである。

目は最も精密に引伸さなければならぬから、最後にしなければならぬ。目の線は、一寸違つても寫眞に似なくなるから、これを引伸す上に於て、やはり長方形の面積を分割する必要がある。先づ、口耳の場合の如く、長方形の面積を二つに分けてみる。それでも正確に引伸しにくいと思へば、二つに分けた面積を、更に縦横に二等分する。そして

出来た小さい四角形により、一分一厘相違のないやうに描いてゆくのである。

下圖は寫真と比較して、出来るだけ正確に描いて置かねばならぬ。さうでないで、描きあげてから寫真に似ないところがあつても、描き直す事が仕難い。それも主要な場所でないければまだしもだが、目のやうな肝心なところだと、それが爲に顔全體が似なくなるやうな事があつて、折角の苦心も水の泡となるのである。

全體の形が出来上つたら、次は陰影である。寫真には、陰影が明かに寫つてゐるから、寫生をする場合に比して、

遙に樂である。唯各箇所の陰影の濃淡にさへ注意して、そして適當の陰影をつけてゆけばいゝのである。

擦筆畫の肖像の描き方

寫真を引伸した肖像の下圖を、擦筆で描き上げる方法を述べる事とする。

擦筆は、紙で造つた筆で、文具店などに賣つてゐる。又吸墨紙を細く巻いて、自分で作る事も出来る。擦筆畫に用ゐる木炭を削り、その黒粉を、擦筆の尖につけて描くので

ある。

擦筆書の描き方は、鉛筆書、ペン書等のそれに比して、楽な點が多い。といふのは鉛筆書、ペン書等では、陰影を線で以て表はすのであるが、擦筆書では、線以外に、寫眞の陰影のやうな、ポーツとぼかした陰影も描く事が出来るからである。

擦筆は、太いのだ、細いのだ二本あればいゝ。細いので細かい場所を描き、太いのでその他の場所を描くのである。そして陰影の場所は、その濃淡により、黒粉のつけ方を加減するのであつて、陰影の淡い場所は、黒粉を極く少しつ

けて描き、陰影の濃い場所は、餘計に黒粉をつけて描く、そして淡い方より、漸次濃い方へ移つてゆくのである。

或は又、陰影の場所全體を、極く淡い陰影で描き、そして濃い場所に至るほど、その上その上と、黒粉をつけつゝ、擦筆の度数を重ねて描くのも一方法である。

尙陰影の極く濃い場所は、擦筆を用ゐず、直接木炭で描いても差支ない。

新しくして描き上げたる肖像書を額縁に入れ、そして壁間に掲げると、書が一段と引き立つて見え、自分ながらその出来榮えに一驚するやうなもの、まい出来るのである。

模寫と繪手本

模寫といふのは、人の描いた繪を手本として、そして我流を少しも交へずに、手本通りに描く事をいふのである。繪の稽古の始めは、鉛筆、ペン、筆等が思ふやうに動かさないが、この模寫をやつてゐると、知らずくのうち、自由自在に動くやうになる。それ而已ならず、線の使ひ方や陰影のつけ方、次いでさまざまの顔の、格好の取り方などを、自然に覚える事が出来、尙その上に、いろくこと

工夫する力が發達する。だから盛んに模寫する事を薦めるのである。

(第六圖)

S君の初夢

富田溪仙畫伯筆



然し模寫は、手本の通りに描くのが目的であるから、自分でいゝ加減の考へを出して、格好

を變へたり、餘計な線を加へてみたり又減してみたりしてはいかぬ。どこ迄も手本に忠實に、一から十迄手本と違はぬやうに描かねばならぬ。

手本としては、名士偉人の肖像畫、大家の繪手本、繪ハガキ或は新聞雜誌の挿畫等、何でもいゝ。前にも云つた通り、本書發行の趣旨は、肖像畫の専門家を養成する爲でなく、娛樂的に描かうといふ人の爲に著はしたものであるから、手本の選擇を、左程迄に嚴重にしなくともいゝ。唯あまりまづい繪だけは、去けねばならぬ。大家の描いたものなら、各點に渡つて缺點がないから、手本とするには、

最もいゝ譯である。

寫生の愉快

寫生とは、目に映するあらゆるものを、實際見ゆる通りに紙面に描き表はす事をいふのである。風景を見てそれを描き表はすのは、風景の寫生、鳥獸を見てそれを寫き表はすのは、鳥獸の寫生、人の顔を見てそれを描き表はすのは、今此に述べんとする人の顔の寫生である。父母の顔、兄弟の顔、友達の顔と、一本の筆やペンで、た

やすく描けるやうになつたら、どんなに愉快であらうか。他の如何なる娯樂でも、匹敵する事の出来ない此愉快は、即ち寫生の熟練から生じて來るのである。以下數章に渡つて、寫生の要點を説明する事とする。

観察力と記憶力

人の顔の寫生を二別して、静止してゐる人の顔の寫生と動いてゐる人の顔の寫生とになる。その静動いづれの顔の寫生にも必要なのは、観察力である。観察力即ち人の顔を

正確に、精密に観る力である。

観察には、外面観察と、内面観察とがある。外面観察とは、外面に表はれた顔の輪廓などの観察であつて、内面観察といふのは、内面に含まれてゐる性格などの観察である。完全なる寫生をしようと思へば、この兩面の観察が充分行き届かなければならぬのであるが、如何にすれば観察力が發達するかといふと、緻密に顔の特徴を観察しつゝ、寫生の回数を重ねよ、といふより外はない。二回三回と寫生の回数を重ねてゆくうちには、顔の餘分な所を見て肝心な所を見落したりする事がなくなつて、必要な特徴ばかり

を見取る事が出来るやうになるのである。

観察力に次いで必要なのは、記憶力である。即ち観察した事を記憶してゐる力である。

静止してゐる人の顔ならば、観察した事を忘れてしまつても再び見直す事も出来るが、動いてゐる人の顔は、何時迄も同じ方向を向いてゐないから、再び同じ方向に向くのを待つて見直すより仕様がなない。それでも、待つてさへれば又見直す機会もあるが、全然その場所を去つてしまつた人の顔となれば、記憶を辿つて描くより他に道がないのである。だから機敏に、顔の特徴を観察するのも必要では

あるが、それと同時に、その観察した顔の特徴を、全部記憶してゐる事も、忽にしてはならないのである。

さまざまの表情

表情とは、悲しんだり喜んだり、泣いたり笑つたり怒つたりする、感情の表現による面相の変化をいふのである。何によつて、斯くの如く面相が變化するかといふと、それは、顔には表情筋といふのがあつて、その筋肉が動く爲である。即ち表情筋の運動が皮膚に傳はり、そしてさまざま

の皺を生じ、その皺の位置により、悲喜その他の感情を表はすといふ事になるのである。

表情を知るのは、寫生をする場合に最も必要ではあるが、これを文字の上で説明して満足に描けるやうにする事は、甚だ困難といふよりは不可能である。例へば、笑つた顔を説明するにしても「口半ば開きて唇を伸張し、且つ口隅少しく上る。従つて頬には皺を生じ、目は細目となりて目尻稍下り、そこに皺を生ず」位の説明より出來ない。この説明によつて、笑ひ顔が満足に描き得るかといふと、決してそうはゆかぬ。



(第七) さくの顔 その一

又笑ふにしても、大笑もあればコン／＼笑ひもあり、嘲笑もあれば泣き笑ひもある。しかのみならず、人には同じ顔のない如く、表情筋の大きさ、位置等も多少なり相違してゐるのであるから、精細にいふと、それにより描き方も多少なり相違する譯である。

だから、これを修得せんとするには、忠實なる寫生によらなければならぬ次第であつて、寫生の回数さへ重ねてゆけば、如何なる表情をも描く事が出来るやうになれるのである。

尙挿入書「さまざまの顔」を参考とせられたい。

静止してゐる顔の寫生の仕方

静止してゐる人の顔の寫生の仕方は、その第一歩を「正面及側面の顔の描き方と寫生する場合」の章で述べて置いた通り、先づ紙面に代表的型を描いて、實際の顔と比較しつゝ代表的型を訂正してゆき、そして描き上げるのが一番解り易くていゝのである。この方法は、随分乙構ではあるが、練習を繰返してゐるうちには、代表的型が自然に頭の中に描けるやうになり、頭の中の代表的型と實際の顔とが

頭の中で比較する事が出来るやうになつて、初めから紙面に、實際の顔が描いてゆけるやうになるのである。本章はこの場合からの、寫生の仕方を説明する事とする。

第一に必要なのは、形の取り方である。先づ紙面に、描くべき顔の大きさとその位置とを定め、そして虚線で顔の大體の格好を取つてしまふのである。

虚線は、顔の各細部に渡らずに、大體の形だけを極く荒く、直線で描くのである。つまり、顔の格好を圍つた六角形なり八角形なりが出来上る譯である。その中へゴツツと實際の顔が入るやうに描いてゆけばいゝのであるから、大

體の格好が狂ふ事もなく、極く描き易いのである。

初め顔の輪廓を描き、それから漸次、疎の部分より密の部分に渡つて寫生してゆくのである。下圖が完全に描けてしまつたら、餘計な線は悉く消してしまふ事を忘れてはならぬ。

次には、顔の凸凹、陰陽、硬軟等を見分け、且つ描き分けるのである。如何に形がよく出来上つてゐても、これ等の表はし方が拙劣であつたならば、變な顔が出来上つてしまふのであるから、凹んだ場所が飛び出したやうに見えないやうに、軟かい場所が石のやうに見えないやうに描き分

けなければならぬ。例へば、大人の顔と、小人の顔を比較してみても、顔の形の違つてゐるのは別として、大人の顔にはゴツ／＼した硬い感じが含まれてゐるし、小人の顔には、フツクリした軟かい感じが含まれてゐる。従つて、凸凹にしろ、陰陽にしろ、異なつた感じが含まれてゐる譯である。だから顔を描くにも、小人には、軟かい感じを持つた丸味のある線を用ひ、大人には、これと反對の感じを持つた線を用ひなければならぬのである。

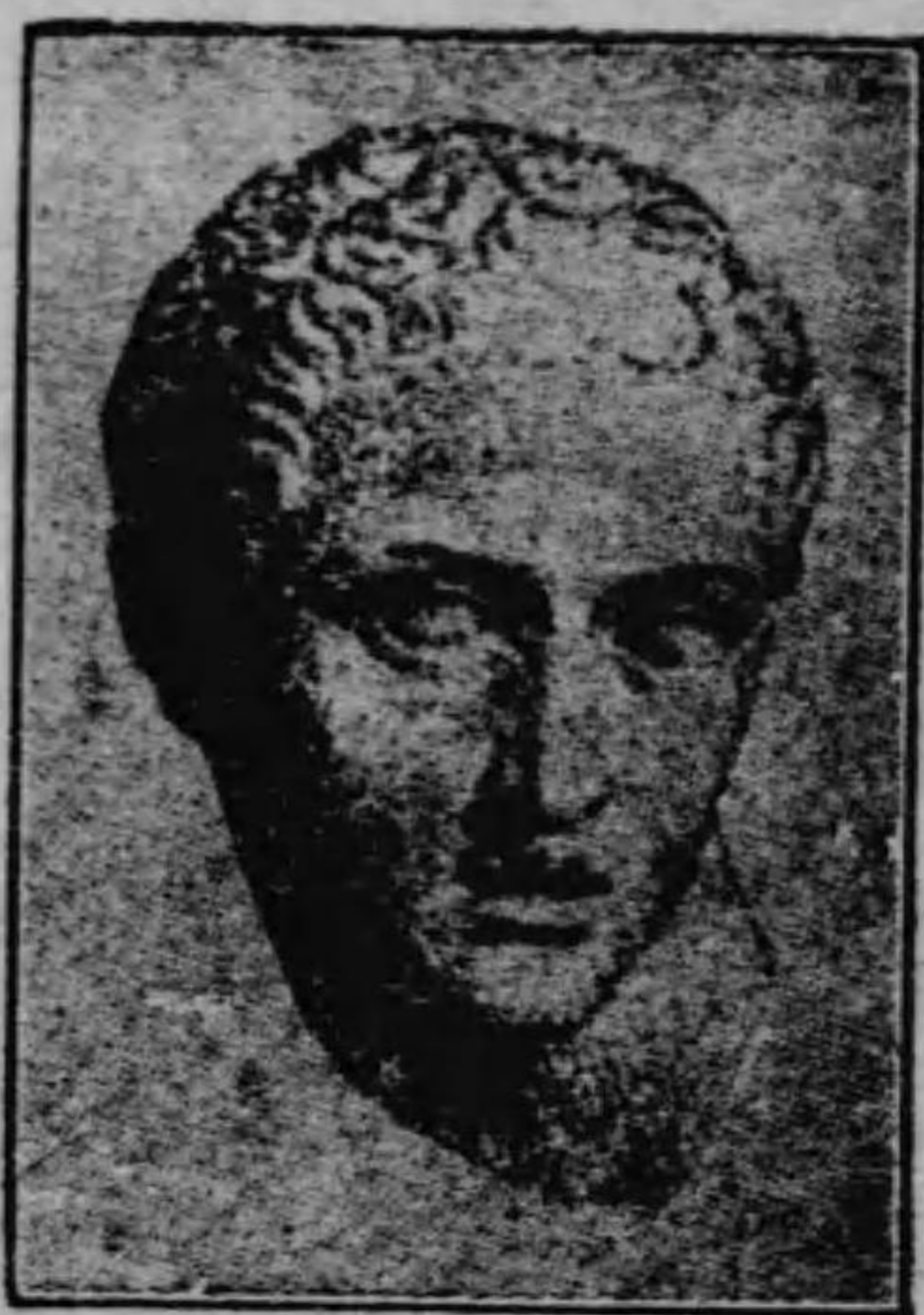
直線でも曲線でも、軽くスウと引いた線は一般に軟かい感じが含まれてゐて、これに反したゴツ／＼した線には、

硬い感じが含まれてゐる。これは線に就ての感じであるが全體に渡つて、かういふ心持ちで描いてゆかねばならぬ。尙これ等の事は、模寫並に寫生に就て、綿密に注意しつゝ練習をすれば、合點もゆき熟練もするのである。

石膏像の寫生

實際の人の顔を寫生する前に、石膏像の寫生で練習する事が一般に行はれてゐる。石膏像は、實際の人の顔と違つて、絶対に動く事のないのみならず、全體が白色であるか

(第八圖)



ら、顔面の筋肉、陰陽等がハ
ツキリとわかり、極く寫生が
仕易いのである。

だから、石膏像の寫生で基
礎を堅めて後、實際の寫生に
移れば、顔面の筋肉の、表情

に伴ふ格好なり、又陰影なりが合點されてゐるから、實際
の顔に應用する事が出来、従つて大して苦しまずに、表情
なり何なりを、描きこなす事が出来るやうになれるのであ
る。

動いてゐる顔の寫生の仕方

動いてゐる人の顔の寫生は、前にも述べた通り、静止し
てゐる人の顔のやうに、一々實際の顔と比較しつつ、精細
に寫生する時間を與へない。だから、鼻口等の位置、筋肉
の凸凹等を、最も迅速に觀察してしまはなければならぬ。

尤も動いてゐる人の顔は、一々見て寫生する時間を與へ
ないのであるから、静止してゐる人の顔のやうに、一から
十迄行き届いた、緻密な觀察をする事は不可能であるとい

(第九圖) さまざまの顔 その二



はなければならぬ。さすれば、何ういふ具合に観察すれば
いゝかといふと、その人の顔の、特徴の大なるものを第一
に見取つてしまふのである。即ちよく肥えて丸顔だとか、
肥えてる割に鼻が小さいが、口が大きくつて出ツ歯だとか
いふやうな、特徴の大なるものより観察して、漸次小なる
ものに及ばなければならぬ。特徴の小なるものは、假りに
見落したとしても其人の顔にはなるが、特徴の大なるもの
は、一つでも見落しては其人の顔にならないからである。
観察に次いで記憶である。動いてゐる人の顔は、観察し
た點を、一々記憶によつて描くのであるから、記憶力が特

に必要である
 事は「観察力
 と記憶力」の
 章にも述べた
 通りである。
 だから記憶力
 が発達してゐ
 ないど、如何
 に緻密に観察
 しても、一本



(第十圖)さまざまの顔 其の三

の線さへ引く事が出来ないのである。
 模寫、石膏像の寫生、静止してゐる人の顔の寫生と、順
 次階梯を踏んで練習すれば、観察力にしろ、記憶力にしろ
 自然に發達して、動いてゐる人の顔の寫生となつても、左
 程の苦心も伴はないが、急仕込みに進んで、そして此に及
 んだ場合は、一寸困難が伴ふ。だから斯かる場合は、特に
 観察力と記憶力とが必要な譯である。

(第十一圖) さまざまの顔 その四



初學者にも顔が似る寫生の呼吸

以上述べ来た事で、顔の描き方は一通り合點されたらうと思ふ。そこで些に、初學者でも顔が似る、最も解り易い寫生の呼吸を説明しやうと思ふ。

幼年時代、殊に繪本を見て「これがお父さん、これがお母さん」と、幼稚な頭腦で繪本の人の髪容と服装とを見て判斷する時代に「お父さんの顔を描いて御覽」と命ずると、丸に目鼻をつけて、そして「これがお父さん」といふ。今度

は『お母さんの顔を描いて御覽』といふと、やはり同じやうな顔を描くのである。この時代には、父母と他人との見分けは無論ついてゐるのであるが、描くとなると唯目鼻口のあるのが、お父さんお母さんといふやうな、單純な判斷より出来ないのである。

それが一二年長すると、今度は同じやうな顔を描いても、お父さんの顔には髭をつけお母さんの顔にはモヂヤ〜とした頭髪をつける。モウ一步進むと、今度は顔の特徴の特に目立つたものを描くやうになる。例へば、お父さんの頭に大きな瘤があるとすると、その瘤を描く。すると、本人

が黙つて描いてゐても、側で見ても『ハハーン、お父さんの顔を描いてゐるのだナ』と解る。何故お父さんの顔を描いてゐるのだといふ事が解るかといふと、父の顔の特徴のうち、特に目立つたものを描くからである。顔が似る寫生の呼吸は即ちこれである。

・幼年でさへ、特徴のうち、特に目立つた箇所を捕へる事が出来るのであるから、少年ならば、幼年には捕へる事の出来ないやうな他の特徴をも、必ず捕へる事が出来る譯であるから、その特徴のみを以て描き上げれば、必ずその人に似た顔が出来るに違ひないのである。唯初學者は、顔

(第十二圖) さまぐの顔 その五



を描く場合に目鼻から先に描きたがるのであるが、これは全然廢さなければならぬ。目は顔中で一番難かしく、目を入れないで似てゐても、目を入れると豹變して似なくなる事が多いのである。だから目は練習を重ねた末に譲つて、初めのうちは描かぬ方がいゝ。殊に距離の遠い顔は、形に重きを置いて目鼻は全然描かない方が却つていゝのである。

最も顔の寫生の仕易い場所

誰でも、知らない人に自分の顔を描かれるのは嫌なもの

で、殊に女などは、顔を赤らめて逃げ出す場合が多い。といふて知らない人に「あなたの顔を描かして下さい」と頼む譯には、

(第十二圖)



ゆかず、又假りに頼んだとしても承諾をしては呉れない。だから

(第十四圖)



ら、どの道大びらに寫生する譯にはゆかないので、その人に氣付かれな

いやうに、コン／＼とやる仕事である。寫生するに最もいゝ場所は、寄席或は芝居である。こん

な場所であると、観客は皆、舞臺の方へ氣を取られてゐるから、コン／＼寫生しても氣付かれる恐れがない。汽車の中なごもいゝ、乗客が窓外の景色を眺めたり、又居眠つたりしてゐるから、寫生するには、極く都合がいゝのである。

その他、人に氣付かれないやうな場所であれば、何處でもいゝ。

漫畫肖像の描き方

漫畫の肖像は、普通の肖像畫とは又違つた趣味のあるもので、誰でも一寸描いて見たがるものである。然しこれを満足に描かうと思ふには、普通の肖像畫で經驗を積んでからでなければならぬ。普通の肖像畫で基礎も堅めないで、いゝ加減に描いてゐれば悪い癖がついてしまつて、漫畫の肖像が満足に描けるやうにならないのみか、普通の肖像畫も満足に描けるやうにならない恐れがある。だから普通の肖像畫で或程度迄の熟練を積む迄は、あまりこれに指を染めてはならぬ。

漫畫の肖像も描き方としては、普通の肖像と同じやうに

(第十五圖)



緻密なる觀察によつて、顔の特徵を捕へるのであるが、その特徵を、その儘に描き表はさず、誇張して描くのである。誇張といふと語弊があるかも知

れぬが、つまり顔の特徵の最も大なるものを主として、顔を描きあげるのである。云ひかへると、内面外面の兩觀察によつて、顔の各部分の特徵を捕へ、その特徵を誇大して、そしてそれに技巧を加へて描き上げるのである。

初めのうちは、なか／＼技巧を弄する事が出来ないで、似てもつかぬヘンチクリンな顔が出来るのであるが、大家の描いたものを見たり、又自分でいろ／＼と工夫して描いてあるうちには、描き方の呼吸が、知らず／＼のうちに飲み込めて、遂に奇抜で面白い肖像畫が、自由自在に描けるやうになるのである。

如何なる初學者にも肖像畫が

正確に描ける方法 (その二)

文具店で引伸し器械といふのを賣つてゐる。器械の一方の端を動かすと、他の端がやはり同方向に、數倍の大きさに動くやうになつてゐる。此器械により寫真なり何なりを線を通つて一方の端を動かすと他の端の鉛筆が、數倍の大きさの肖像を獨手に描いてゆく。だから、稽古時代にはこの器械によつて描いて見るのも亦面白からう。

(第十六圖) 達磨



近藤浩一路畫伯筆

(第十七圖) 達磨



織田東禹畫伯筆

(第十八圖) 達磨



赤松隣作畫伯筆

繪の具

鉛筆、毛筆などで描いたものに、淡彩をほどこすのも興味が深いものである。だから最後に色の調合法を述べて置く事とする。

赤 青 黄

色の数は澤山あるやうに思はれるが、實はこの三色より無いのである。これを原色といふ。

緑……青と黄とを交へたもの。

紫……青と赤とを交へたもの。

橙……赤と黄とを交へたもの。

紺……原色を三つ交へたもの。

この四色を間色といふ。尙これ等の色を、いろくくと交へると、目に映するやうな種々様々な色をつくる事が出来る。前記七色の外のさまざまの色を、複色と稱するのである。複色は其數限りないから些に説かぬ事とした。自分でいろくと調合してみても合點される事を望むのである。

「わが顔」募集

本會は、諸君の趣味の向上を計る爲、且つ肖像畫獎勵の爲「わが顔」を募集するから、自分の顔を描いて本會へ送られたい。その最も優れた作品と認められた時は、左の賞品を贈呈する事あるべし。

—(兌)—

價格五圓

一 萬年筆

價格三圓

二 洋畫用具

(繪の具、スケッチブック、ゴムナイフ、鉛筆等取揃へ一式)

應募の規定は左の通りである。

イ 用紙。ハガキ或はハガキ大の洋紙に限る。ハガキ

は畫面の汚れる恐れがあるから、なるべくハガキ大の洋紙に描き、それを封筒に入れて送られたい。

開封ならば貳錢切手を貼ればよろしい。然し通信文を入れた場合は、參錢切手を貼らぬと不足税を取ら

れる不足税付の手紙は、本會は受取らぬ。

ロ 顔の大きさはハガキの大きさ以内。

ハ 一人で數枚送られても差支ない。

ニ 鉛筆畫、ペン畫、毛筆畫、淡彩をほどこしたものと等

—(兌)—

いづれでもいゝ。

木 緻密なる肖像畫、スケッチの肖像、漫畫の肖像等、

いづれも隨意である。

へ 帽子を冠つた顔、冠らぬ顔等も隨意である。

ト 畫面には、雅號或は名前の外、何も書いてはならぬ。

名前もなるべく簡單に書かれない。例へば「實生」

とか「大澤生」とか、又英語で書くとかされたい。

チ 畫面の裏、即ちハガキならばハガキの表に、住所、姓

名、年齢を楷書で解り易く書いて置かれない。

リ 數枚送らるゝ場合も、やはり一枚／＼に住所、姓名、年

齡を書いて置かれない。

又 その他の通信文は別紙に書く事。

ル 送附された書の、すぐに返送しないものは、佳作と

認められたもので、次に書いてある「わが顔」に掲載す

るものと承知されたい。掲載する爲に寫眞版或は凸

版に撮つた上返送する。返信料同封すれば批評もす

るし、又佳作であるか否かもお答へする。

ヲ 質問その他の問ひ合せは、返信料封入で寄越される

か、或は往復ハガキの事。澤山の人の事ですから、

返信料が無ければ解答しませぬ。

本會は、目下「わが顔」と稱する肖像畫集を、出版の計畫中である。就ては、諸君より送附された肖像畫のうち佳作は、住所、姓名、年齢、雅號等を記入の上、寫眞版或は凸版として、本書に採録する考であるから、本書によつて學んだ人は必ず一枚たりとも送附せられる事を望むのである。

附記。「わが顔」は頗る美装の上、發行する考で、掲載者には、發行に際して、その旨通知する事とする。

肖像畫秘書 終り

大正八年十月廿一日印刷納本
大正八年十月廿五日發行

(定價金壹圓貳拾錢)

(製許複不)

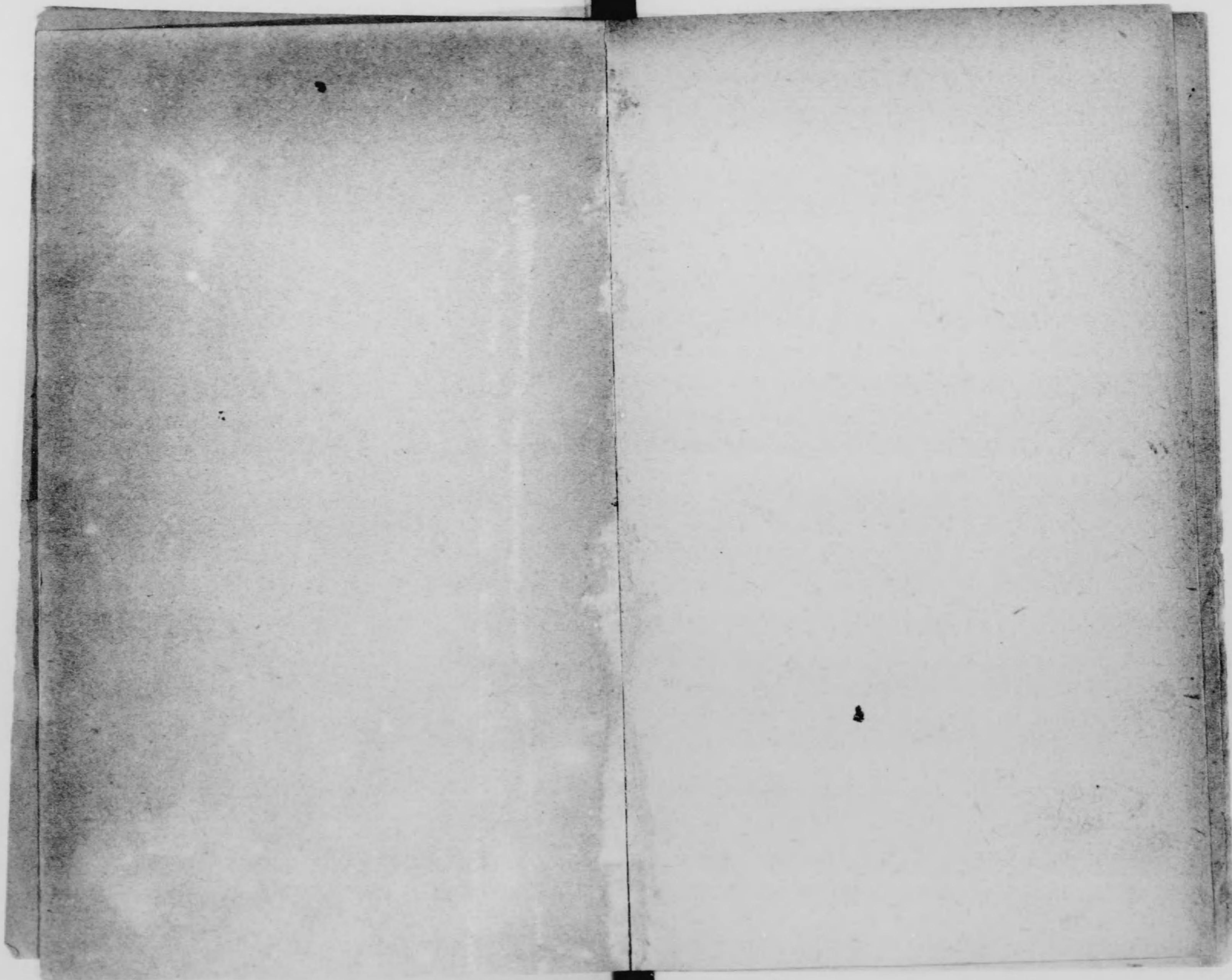
著作者 日本肖像畫研究會
發行者 東京市本郷區新花町六十八番地 大橋 猛
印刷者 東京市神田區三河町四丁目三番地 吉田印刷所
吉田常八

發行所

日本肖像畫研究會

東京市本郷區新花町六十八番地

振替口座東京四八三五四番



8.12. 2

373
382

終